

200xファミリーデザイン
室室長。著書に『変わる家族
変わる食卓』など。

あしがき の めりめり

一九五四年公開の木下恵
介監督の映画『二十四の瞳』
は、近づく戦争を背景に、
運命に翻弄される子供たち
を主役に、生命の尊さを描
いた作品だ。黒澤明監督「七
人の侍」を上回り同年の「キ
ネマ旬報」一位に輝くなど、
当時の評価は高かった。し
かし、前者は今、後世に多
大な影響を与えた後者ほど
顧みられることはない。

本書は、この忘れられた
名作に焦点をあてたノンフ
ィクション。子役やスタッ
フへの丹念な取材を通じ
て、物語の展開とともに制
作現場の情景を再構成。同
時に、映画がヒットしても
芸能界などには進まず、映
画を誇りに生きた子役たち
の「その後」を追う。

執筆のきっかけは二〇〇
四年四月、子役たちが映画
公開五十年を機に、小豆島

『二十四の瞳』からのメッセージ 澤宮 優氏



に集まることを報じた新聞
記事。シナリオ作家を目指
していた十数年前、木下作
品を繰り返し見て感嘆した
記憶がよみがえった。

「今こそこの映画が見直
されるべきだ」と取材を始
めた。「一家離散や生活苦
で学校に行けなくなる子も
いるが、弱者への温かいま
なざしが映画を貫いてい
る。これこそ経済成長の中
で日本人が失ってきたもの
だ」との思いからだ。子役
たちがいまも役名で呼び合
い、家族にいないことも
打ち明ける濃密な人間関係
も同様だろう。

高峰秀子演じる「大石先

弱者への温かい視線再評価

生」はよく泣く。生徒の境
遇に同情して、ただ泣くの
だ。消極的な姿勢にも見え
る。だが、著者は「共感を
得られている実感があれば
子供たちは安心できる。こ
れがあれば子供の殺伐とし
た事件も起きないのででは
いか」とみる。

主にスポーツ分野で執筆
してきたが、日の当たらな
い存在に目を向ける角度は
初めて映画を扱った本作も
変わらぬ。「僕自身劣等
生だったから、人間の弱さ
やもろさに関心が向く」。
大石先生同様、つぎること
ない共感が原動力だ。(洋
泉社・一、七〇〇円)

料をさんだんに提供してくれる。

編集委員 岩田 三代

(鴻英良訳、みずす書房
四〇〇円)
▼著者は現代芸術家。